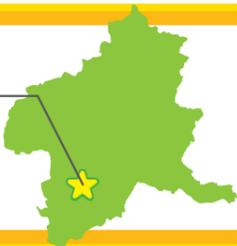


解説員が歴史の意義を伝え、世界遺産を支える

富岡製糸場解説員の会

富岡市



平成26年6月「富岡製糸場と絹産業遺産群」として世界遺産登録された富岡製糸場。地域の解説員が見学者の説明にあたる。定年後のボランティアが誇りを持って歴史を伝えている。



当時の写真を手に、建物案内図の前で解説



明治時代の建物について、その価値を伝える

●活動内容

世界遺産として注目を集め、連日観光客でにぎわう富岡製糸場。立ち並ぶ歴史遺産群の意義をより深く理解するのに欠かせないのが、ボランティア解説員によるガイドだ。

富岡市のほか、甘楽町、下仁田町などから集まった、定年退職した人を中心とする実働70名ほどの意欲あふれる解説員がガイドにあたる。

ガイドは、観光客30~40人を相手に、敷地内を移動しながら行う。建物の歴史的な価値について説明したり、製糸場の指導者であったフランス人の写真を見せながら、40分ほどで説明していく。観光客でにぎわう中、通行のさまたげにならないような配慮も欠かせない。

解説員は、半日二千円の有償ボランティア。一人当たり、午前または午後2回のガイドを行うのが基本だが、なかには午前と午後を通し一日に4回行う人もいる。

世界的に認められた重要な遺産にお客さまを迎えるにあたり、ボランティア解説員は誇りを持ち、日々努力を重ねている。

●事業を始めたきっかけ

「富岡製糸場解説員の会」は、富岡市の働きかけにより平成19年に設立されたが、その母体は平成8年に発足している。

富岡製糸場は昭和62年に操業を停止していたが、当時の所有者がその後も建物の維持管理に努めていた。見学を希望する声が高く、平成8年の夏、外観のみ見学を可能とし、産業遺産としての歴史的価値をより多くの人に正しく理解してもらうため、解説を行ったのが始まりである。

当初は、甘楽町・富岡市内小中学校の退職校長会の会員18名で解説を始めた。現在、富岡製糸場解説員の会会長の関 利行さん(85)は、かつて富岡市内の中学校に教員として勤めており、製糸場の会社の社宅に家庭訪問に行ったこともあるという。

関会長は、富岡製糸場が操業していた頃を知る意味でも解説員として重要な存在だ。会長のほかにも、平成8年当時からの会員があり、当時からの解説員たちは80歳を超えるため、今後の活動に向け後継者を育てることが課題となっている。



笑顔でお客さまに話しかける



大勢の観光客の前に、熱意をもって解説

●工夫している点・特長

解説員は高齢者が多いため、暑さが厳しい季節には首を冷やす布を身に着けてもらうなど、体調管理に気を配っている。

解説員になるには、2日間の養成講座を受講する必要があり、さらに、40分間ガイドする実地テストを経てデビューとなる。話す内容、声の大きさや話すスピードなど、利用者に製糸場のことを分かりやすく伝えられているか総合的にチェックする。

基本マニュアルに沿ったガイドに加え、養蚕農家だった人は養蚕の話を、元建築家の人は建築について

詳しい説明をするといった個性もプラスしている。

ガイドは人と対面しながら進めるため、相手の反応を見て、興味がありそうなら詳しく、逆に、ないならスッと流す技術も必要。経験を積むことでできるようになってくるようだ。

「製糸技術の面や、建物や工女の生活などから、なぜ世界遺産になり得たのかをわかりやすく伝えることが我々の役割。解説員には『解説あつての富岡製糸場』だと繰り返し言っています」と、関さん。



〈やりがい・楽しみ〉

「解説が終わった時に『よかったよ』と声をかけてもらうことがとてもうれしいですね。小さなお子さまから高齢者まで、さまざまな方と交流できるのも醍醐味。『解説に役立ててください』とお客さまから養蚕に関する本をもらったこ

ともあります。富岡製糸場が世界遺産になった貴重な瞬間にも立ち会い、世界遺産をガイドできることに、全員が誇りとやりがいを感じています。今後もガイドの意見を汲み上げ、ガイドの質の向上を目指します」と、関さんは話す。

基礎データ

☎0274-64-0005

富岡市世界遺産まちづくり部
富岡製糸場課

事業開始時期/
平成19年

主な活動/
富岡製糸場見学者への
解説・案内

人数・年齢/
実働70名程 60歳以上

実施主体/富岡市

